

【書評】

二井正浩編著『レリバンスの視点からの歴史教育改革論
－日・米・英・独の事例研究－』

(風間書房, 2022年刊, 224頁) 2,500円+税

山内敏男

(兵庫教育大学)

学ぶ意味や意義を子どもが実感できる歴史学習とはどのようなものか。本書は日・米・英・独の事例を手がかりにレリバンスの視点から歴史教育の改革を提言している。

本書の全体構成は次の通りとなっている。

はじめに (二井正浩)

第1部 日本の歴史教育改革とレリバンス論

第1章 「歴史総合」の新設とレリバンス論の必要性 (二井正浩)

第2章 生徒が歴史授業に見出すレリバンスの質的検討－問いを構築する「世界史探究」単元「自由について考える」の場合－ (宮本英征)

第3章 レリバンス論とその射程 (田中伸)

第2部 諸外国におけるレリバンスの視点からの歴史カリキュラム改革

第4章 米国の新・新社会科期の歴史レリバンス論 (原田智仁)

第5章 米国にみる学習レリバンス構築のための主題的歴史カリキュラム構成論－R.メトロのカリキュラム論を事例に－ (中村洋樹)

第6章 生徒の動機づけを図る学習レリバンス構築のための歴史学習－ドイツバーデン・ヴュルテンベルク州用歴史科教科書の検討を基に－ (宇都宮明子)

第3部 諸外国におけるレリバンスの視点からの歴史学習・評価改革

第7章 生徒の感情に関与することを重視する米国の歴史学習プログラム (空健太)

第8章 英国における評価問題を手がかりとした歴史学習のレリバンス (竹中伸夫)

第9章 歴史政策問題のヒストリー学習/メタ・ヒストリー学習に基づく歴史授業－ドイツの諸事例を手がかりとして－ (服部一秀)

本書におけるレリバンスの意味は冒頭で二井が示すように「子どもにとっての学びの意味や意義」

を表す概念であり (p.i), 子ども自身の文脈や、現代社会と関連付けた「自分事」としての学びが必要だとする。続く第1章で二井は『『指導と評価の一体化』のための学習評価の参考資料 高等学校 地理歴史』の分析から、「歴史総合」で想定されている問いは生徒の「個人的レリバンス」に基づいた問いが不十分なもの、あるいはどう深化して「社会的レリバンス」へと育つのかあまり明確でないものもあると説く。生徒の「問い」の位置付け、関連付けに検討を要するという指摘が端的に示すように、歴史を学ぶ意味をもった「自分事」として包摂することはそう容易くない。あるいは、歴史総合の標準単位数 (2単位) に対して教科書の分量 (文量) が多く、履修しきれないとの声も学校からは数多聞こえてくる。内容を網羅することに学びの意味を見出している点は原田が取り上げている「社会の文法」に他ならない。こうした歴史教育の問題に対して、変革はいかに可能か、以下他章から紐解いてみたい。

レリバンス「論」の来歴や経緯は第3, 4章で詳述されている。第3章で田中はA・シュッツが整理・定義した概念であるレリバンスは一般的には有意性や有意味性、関連性と訳されるなどそもそも多義的であると指摘する。その上で、学びに対する有意味性は生活世界における知識と行為を条件付ける三つのレリバンス (主題的・動機的・解釈的) の連続性の中で整理でき、レリバンス発現の主要因である動機を行為と反省の軸で捉え直すことができるとする。一方で教師もなぜそれを考えるのか (学ぶのか), 子どもたちと相互に (再) 構築するコミュニケーションが必要であると指摘し、共に議論できる場の構築こそ、民主主義の形成、維持、発展に寄与する反省的实践家たる教師の構えとなり得ること、教師の脱権力性へのスタンスの必要性を説いている。

続く第4章で原田は1960年代末から70年代にかけての新・新社会科期においても「(第一期)歴史レリバンス」運動があり、その退潮は理念や理論の脆弱さからではなく、国家や経済界の要求といった外的要因によるものであるとする。諸科学の概念を踏まえた探究と生徒の情意面(価値やエンパシー)の方法を重視し、単元は原則的に循環的アプローチの方法(社会の問題を価値や感情の問題として導入に位置付け、過去に起きた類似の問題の文脈的考察から再び感情的問題に立ち返る方法)で構成することが、「日本版レリバンス」運動の象徴たり得る「歴史総合」の特質に示唆を与えるものであると指摘する。

このほか各章では、それぞれの著者が掲げる「キーワード」がレリバンスに関連付けて論じられている。

第2章は「問いの構築」が関連する。宮本は世界史探究単元「自由について考える」の実践から生徒が見出すレリバンスの質的な検討を試み、問いの構築学習とレリバンスの関係について、第一に社会認識と市民的資質を一体的に育成し、社会的レリバンスを論理的には保証できること、第二に多くの生徒は歴史認識ではなく社会認識に対して、主体的に深く学ぶことにレリバンスを見出すこと、第三にレリバンスを視点として授業論、授業構成論を構築することで、歴史授業の改善の方略を示すことができる点を明らかにしている。

第5章で中村はR.メトロが提示した主題的歴史カリキュラムを事例に、「本質的な問い」と「文書を基盤にした授業」に着目する。そして多様な実態にある生徒の受け止めに対する配慮、歴史上繰り返されてきた本質的な問いを探究すること等、昨今提案されている歴史授業は、いかに歴史的事象と現代的課題とを接続させるかに着目する傾向にある現状と対峙する。

第6章で宇都宮は生徒の「動機」に着目する。ドイツ、バーデン・ヴュルテンブルク州用ギムナジウム歴史教科書を事例に、学習レリバンスの検討を行っている。生徒が動機づけられながらコンピテンシー育成を行うためには、単元目標、史資料、学習内容、学習方法が相互に関連づけられて課題が構成、組織化されること、生徒の興味関心に即した多様な学習方法での取り組みが必要であると論じる。

第7章で空はアメリカのNPO(HFAO)のカリキュラムから、「感情」を考慮した「困難な歴史」(事例ではホロコーストの問題)を取り上げることで、過去の誤りから将来の民主主義社会の市民を育て得ることを紹介する。本カリキュラムでは、学習者を感情的に揺さぶり関与させることが学びの意義を生み出すと指摘し、「困難な歴史」から学ぶ意義を論じている。

第8章で竹中はイギリスの中等教育資格試験(GCSE)の評価問題の分析から、歴史学習の実態はその目標実現のために、科学的歴史認識を目指す高度な歴史的探究と思考、表現が求められているとする。歴史を通じて現代社会の理解ができるように、資料から事象間のつながりや変化を読み取り(操作し)、表現することがイギリスにおける歴史学習のレリバンスであるとする。

第9章は「メタ・ヒストリー」が関連する。服部は歴史授業を現在について見つめ直すことや未来について問い直す一つの方法として、記念日など過去についての公的な取り扱いに関わる歴史政策問題学習の可能性を説く。メタ・ヒストリー学習は現代的課題意識と過去認識とでどちらを優先するか、ヒストリー学習とメタ・ヒストリーのどちらを取り入れるかにより4類型に整理でき、大なり小なり自己の歴史認識や自己意識に関わって過去についての公的な取り扱いを批判的に判断すること自分たちの社会をよりよくしていこうとする学びの意味を見出すとする。

本書で示されたレリバンスの視点を実践に適応させていくためには、例えば歴史の知識を覚えることを「専有」している生徒(詳しくは、星瑞希(2019)「生徒は教師の歴史授業をいかに意味づけるのか?—「習得」と「専有」の観点から—」『社会科研究』90号、pp.25-36)に対していかに動機付けするかといった課題を克服する必要である。また、児童・生徒にとって現時点でレリバンスを有しないものであっても取り上げる課題、問題は存在する。よって動機や問いの生成をめぐり、実践に際しては授業者と子どもとの間で捉え方の齟齬はないか、無闇に現在と過去をつなげていないか等々、不断の問い直し、子どもをも巻き込んだ対話が必要となろう。